愛国学園大学人間文化研究紀要　第23号　11～22頁　2021年３月

〔論文〕

金魚の王様と言われている「らんちう」の語源について
～「らんちう」とは何語なのか、どんな意味があるのか～

太田和　良　幸

Many people know that there is a goldfish named "ranchu (らんちう)" in Japan. It is the kind of non-dorsalfin fish, egg shape one, but said to be King of the goldfish. When you purchase this, it becomes the good price. However, nobody knows a word this "ranchu" is the word of any country, nor the meaning of it. I aimed at solving this mystery in this study.

Goldfish is an ornamental fish made artificially in China. The original goldfish which were in Japan in Edo era were brought all in from China. However, "ranchu" is a kind with a unique quality created in Japan. This kind was made in the Meiji era. but we name the modern "ranchu" after the name reached Japan in the Edo era. Modern "ranchu" is different from "ranchu" of the Edo era for a kind. But they have the same name.

In this study, I examined what you meant by this name that came in the Edo era. In a picture book of the Edo era, there is a commentary to call a goldfish without the dorsal fin both <ranchu> and <danchu>. In this study, I paid my attention to this point and developed the reasoning.

I looked for a kanji (Chinese character) based on a premise that the name "ranchu" could be brought from Chinese. Because <ran> and <dan> sound sometime exactly the same to our Japanese, I looked for a kanji which have the similar pronunciation with <ran> and <dan> and have the valuable meaning. As a result, I found a word "蛋", which means egg with shell like duck egg. In addition, about <chu>, I found the word "種", which means kind.

From this consideration, the etymology of "ranchu" is found to be a southern Chinese pronunciation such as Cantonese of the word "蛋種". This "蛋種" is used as one of the classifications of the kind of the goldfish in China. It would be suitable as a name of the goldfish without the dorsal fin in the 18th century.

In addition, it is thought that various words used as a kanji to express "ranchu" in Japanese are substitute characters devised in Japan by pronunciation called "ranchu".

キーワード：金魚、らんちう、らんちゅう、蛋種、江戸時代
Keywords : goldfish, ranchu, japan, edo era, egg shape

1　はじめに

金魚の種類に「らんちゅう」と呼ばれる品種がある。一般に金魚の王様と言われ、この品種をこよなく愛する人も多く、全国各地にこの「らんちゅう」の愛好会が存在する。これらの愛好会では、毎年品評会を開催するなど盛んに活動している。日本らんちう協会という愛好会の全国組織も存在する。

本稿では、世間一般で使用されている「らんちゅう」ではなくて、この全国組織でも使っている「らんちう」という古い表記方法を使用する。江戸時代には「らんちう」と表記していたからである。

また、本稿では、「らんちう」の語源について考察することを目的としており、日本で金魚の王様と言われている「らんちう」が、どのようにして創作されたかは触れていない。現在の日本で金魚の一品種としてもてはやされている「らんちう」は、明治の初期に東京の石川亀吉氏が作出したものと言われている。つまり、この現代の「らんちう」と同じ金魚が、数百年前から存在していたわけではないが、「らんちう」という金魚の品種名は、文献上江戸時代中期（18世紀）から存在していて、その品種名が現代の「らんちう」に使用されている。

本稿でとりあげるこの金魚は、時に「らんちゅう（ランチュウ）」と表記されたり、漢字で魚編に蘭と書いた字に魚編に壽と書いた字を並べることもあり、さらには「卵虫」と書く場合もある。いずれも、読みは「らんちゅう」である。「らんちう」と書いても現在は「らんちゅう」と読む。読みは定着しているが、表記は定まっていない。

筆者は、この表記が定まらないことに以前から疑問を感じていた。「らんちう」の漢字での表現方法が定まらないというのは、なぜなのか。漢字を見てもその意味が分からないのはなぜなのか。結論として、漢字は単なる当て字であって、本当の意味は別にあると考えるに至った。

「らんちう」のような背びれのない金魚は、ある中国の書籍[i]によれば、1596年に初めて出現したと書かれているが、根拠は示されていない。一般的には、中国で背びれのない金魚が確認できるのは、公刊本では[ii]清朝の初期（1725年）に完成された「古今図書集成」博物彙編の禽虫典に掲載された金魚図だと言われている。日本に入ってきたのが文献上確認できるのは、同じく18世紀である。安達善之の「金魚養玩草」（1748）には、「らんちう」は、「近年異国（から[iii]）より渡りし時、始てこれを見る」と記載されている。このため、本稿では日本に背びれのない金魚が持ち込まれた江戸時代（18世紀）にそれがどういう名称だったのかを基本に「らんちう」の語源について考察した。

そして今回、この「らんちう」が、「蛋種」という中国における金魚の分類上の呼称の一つであって、中国の南方の発音であるとの推論の結果を得た。その詳細は本編で説明する。

なお、本稿と同じ趣旨の「らんちう」の語源に関する記述が10年以上前からインターネット上に複数存在するが、これは、筆者がメモ（未定稿）として記述したものを自分が作成したホームページ[iv]にアップロードしてあったからである。筆者個人はこのようなネッ

ト上の記事を見る人はいないだろうと思っていたが、国内外に見つけた人がいて、日本人には非常に賛同された。上記メモは、既に全文が韓国語に翻訳されて、ネット上に掲載されている。また、中国のサイトに日本語のままコピーされているのを発見したこともある。

2　「らんちう」という呼称

日本の「らんちう」については、筆者が解説するまでもなく、書物を通じても紹介され、現代では多くの人々がウェブ上でも紹介している。ただ、この品種の金魚を何故「らんちう」と呼ぶのかについて、知っている人はいない[v]。

既述の通り、「らんちう」という言葉からは、すぐに日本語の意味が理解できず、和語としての意味を持っているとは思えない。金魚の「らんちう」は、漢字で「卵虫」、「蘭虫」あるいは、魚編に蘭及び魚編に壽と書いたりするが、これらの漢字を見ても意味は分からない。最近、一部の日本の金魚飼育雑誌に「らんちう」の名前の由来は、中国語の『蛋虫』や、『蛋魚』、『蛋種魚』を由来とする説があると書かれているものがあるが、これらは前述の筆者のネット上に記載したメモ（未定稿）を参考にして書いたか、筆者がその著者に示唆した内容をこのように書いたと思われるが、いずれも根拠が示されていない。なお、この中で、『蛋虫』という語は、中国内の金魚の飼育本にも見当たらない単語であり、どうしてこのように説明されているのか理解できない。

「らんちう」という言葉は、漢語（中国語）のような印象を持たれる日本人も多いだろう。あるいは、江戸時代に西洋人が持ち込んだ金魚の種類だとの考えから、オランダ語かポルトガル語のように思う人もいるだろう。現に魚編に蘭と書く書き方は、オランダ（阿蘭陀）の蘭を使っているのだから、オランダ語だろうと思う人もいると考えられる。

ところで、日本語の中でも、漢語だと言う認識無しに使っている言葉はたくさんある。例えば、「すいか」、「みかん」、「いす」、「きれい」、「かわいい」などである。これらは和語のようだが、中国語にそっくりの発音がある。それぞれ、「西瓜」、「蜜柑」、「椅子」、「綺麗」、「可愛」である。上記のように、無意識のうちに使っている日本語の中に漢語があることもあるが、「らんちう」の場合は、既述の通り中国語の中に、日本で表記している「卵虫」、「蘭虫」、「蘭鋳」などの漢字やそれに似た金魚の品種や呼称を見出すことは困難である。以前筆者が中国の北京に住んでいた頃、高名な中国人の金魚の研究者を訪ねた時に、「らんちう」の日本での表記方法である「卵虫」や「蘭壽」等の漢字を見ていただいたこともあるが、漢字の意味は分からないとのことだった。蛇足ながら、その方は日本の「らんちう」のことをよくご存じで、品種として素晴らしいと言って褒めてくれた。

中国語では、金魚の品種の呼称が地方によって様々で、一般に日本の「らんちう」のような品種を、「獅頭」、「虎頭」、または「寿星」のいずれかで呼んでいる。これらの読みは、中国語の普通話（標準語）の発音では、日本語のカタ仮名で表現すると「＜シートウ＞、＜フ（ホ）ートウ＞、＜ショウシム＞となる。どれも、＜ランチウ＞とは聞こえない。

なお、最近では、日本の「らんちう」が中国でも知れ渡り、高く評価されるため、中国に逆輸入され、名称も日本で使っている漢字を使う場合がある。1990年以降、特に21世紀になってから出版された中国の書籍の中には、こうした表記をしているものも見られる。これは中国にとって漢字の逆輸入になるが、中国人にも意味が分からないだろう。

では何故、「らんちう」という名称[vi]が日本にあるのか。以下、解き明かしていきたい。

3　江戸時代の「らんちう」という呼称

3.1　江戸時代の各種の呼び方

江戸時代には既に「らんちう」という背びれのない少し丸々とした体型の品種の金魚の呼称、名称があり、これを示す最も早い書籍としては、1748年に刊行された安達喜之の「金魚養玩草」がある。この書籍では、「らんちう」は、漢字では「卵蟲」と書かれていて、右側に「らんちう」とひら仮名で振り仮名が付されている。また、この卵という語の左側に「ダン」とカタ仮名で振り仮名が付いている。

また、1751年に作られた中国の閩地方（現在の福建省）の産物について解説した「閩書南産志」（何喬遠）には、「寸金魚」に「ランチウ」という振り仮名が付いている。1759年刊の「廣大和本草」には、「蘭職烏」に「ランチウ」という振り仮名が付いている。また、当時は、「金鼈」、「金鱉」とも書き、「らんちう」と読んでいたことも分かっている。但し、「鼈」と「鱉」は、ともにスッポンのことであるので、なぜ「金鼈」、「金鱉」と表記されるのかは、よく分からない。なお、1830年刊の「嬉遊笑覧」巻12下魚猟には「金鱉はらんちう又丸子など呼もの也」とあり、1837年刊と言われる「類聚近世風俗志：原名守貞漫稿」第五編生業下錦魚賣の欄には、「…京阪これを蘭蟲と云 らんちうと訓す 腹大にして形鞠に似たる故に名とす 又まるつ子と云は江人訛也」とある。

このように、「らんちう」に当てはまる漢字が何通りもあるということは、これらの漢字が当て字であると考える根拠となる。つまり、日本にこの言葉が入って来たのは文字ではなくて、言葉（音）であって、この発音がどういう漢字で当てはめたらよいのか分からなかったからこそ、後に当て字が考えられたに違いないと考えた。カステラを「加須底羅」といったり、テンプラを「天麩羅」と書いたりするのと同じ要領である。「らんちう」とは外来の言葉であり、1639年にポルトガル船の来航を禁止して以来鎖国状態になっていた日本が限定的に外国に門戸を開いていた長崎方面から日本国内に入ってきた名称の一つと考えられる。

では、何語なのか。鎖国時代の前後に貿易に携わっていた国々の言葉、すなわち、オランダ語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、英語のいずれかであると推察される。

3.2 「ランチウ」と「ダンチウ」

ここで「らんちう」とは何語なのかを知る上で、安達喜之の「金魚養玩草」とともに、非常に重要な手がかりとなる栗本丹州（本名：昌臧　1756年～1834年）という人物の残した「らんちう」の絵に着目したい。筆者はこの絵の説明文（書き込み）を見て、「らんち

う」の語源が理解でき、本稿を書くことにした。

栗本丹州なる江戸幕府のお抱え医師は、本草学者（博物学者）でもあり、彼は、多くの「魚譜」を作っている。これらの「魚譜」は収蔵数も多いが、実に精緻な描写となっている。実は、この栗本の魚譜は、以下の説明に用いる「らんちう」の部分を含め、一部は宝暦年間（1751-63年）に高松藩の作成した「衆鱗図」という魚譜をコピーしたもの[vii]であることが分かっている。明治時代に博物局で作成された『博物館魚譜』の中にこの栗本の魚譜が収録されている。

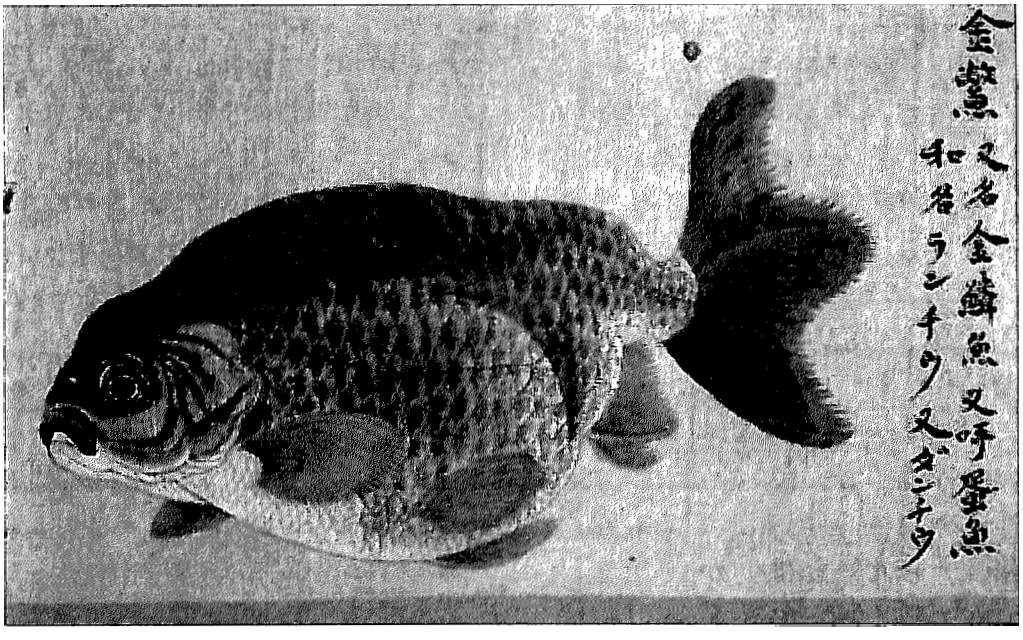

図1　伝栗本丹州作　金魚図

（出 典）東京国立博物館研究情報アーカイブズ「博物館魚譜＿金魚」（部分）

この栗本の金魚図の中には、衆鱗図の図（絵）に加えて、当時の「らんちう」を指して、

金鱉　又名金鱗魚　又呼蛋魚
　　和名ランチウ　又ダンチウ

と右側に解説がある（図1参照）。「金鱗魚」とは読んでその意味のとおり、鱗の金色の魚である。「蛋魚」とはアヒルの卵のように身体が丸い（背ビレがない）魚の意味で、後に説明する「蛋種」と同義である。

ここで重要なのは、「ランチウ」又は「ダンチウ」という解説である。この表記は、安達善之の「金魚養玩草」の中にも見られる。多くの書物では、「ランチウ」という一方の表記しかないが、栗本と安達の絵、書物には二通りの読みが記載されている。つまり、「らんちう」のことを18世紀頃、つまり「らんちう」が日本に持ち込まれた頃には、＜ラ

ンチウ＞と言っても＜ダンチウ＞と言っても良かったということになる。江戸時代のその後の書籍で「ダンチウ」という表現が見られないということは、しばらくして何らかの理由で「ランチウ」で統一されたものと思われる。江戸時代に安達の「金魚養玩草」は、金魚飼育本としてバイブル的存在になったと言われているので、同書の影響も少なからずあったと思われる。

では、なぜ、当初＜ランチウ＞と言っても＜ダンチウ＞と言っても良かったのだろうか。それは、同じことを意味していたから、すなわち、同じ語（漢字）の発音だったからだったと考えた。

いずれにしても、この栗本丹州の説明文等から解釈できることは、「らんちう」の「らん」という語は、我々日本人には、＜ラン＞とも聞こえ、＜ダン＞とも聞こえる音だっただろうということが推察できる。

4　「らん」とは何か ～＜ラ＞と＜ダ＞の関係

4.1　中国語及び日本語での＜ラ＞と＜ダ＞の発音

上記3.1では、「らんちう」の語源は、オランダ語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、英語のいずれかであると推察されると書いたが、金魚自体が中国が原産であり、18世紀には西洋には存在しないものだったはずなので、「らんちう」という名称は、中国語そのものであるか、あるいは、中国語の名称を西洋の言葉に翻訳したものとしか考えられない。いずれかであろうことは分かるが、寡聞にして、筆者の知見の範囲では、オランダ語、スペイン語、ポルトガル語、英語で18世紀に存在した金魚の一種の背びれのない品種の呼び方は探し当てられなかった。

他方、中国語には、＜ラン＞とも聞こえ、＜ダン＞とも聞こえる音があり、想像できる漢字も見当がついたので、以下では中国語の発音と聞こえる音について考えてみたい。

筆者は中国語の<dan>という発音は日本人には＜ラン＞とも聞こえるはずだと考えた。これは、中国語では、<da>と<la>の発音はともに、舌先と歯茎で発音する音であり、似た音になるからである。なお、正確には、日本語には、<la>の発音はなく、日本独特の<ra>の発音があり、日本人は、<la>も<ra>も区別できない。また、中国語には<ra>の発音はない。

筆者自身の中国語発音学習の経験からも、<da>と<la>の発音はよく似ている音だと思う。中国語に熟達していない日本人が中国語の<da>という発音を聴いたら、＜ラ＞と聞き間違う人が出ることは容易に想像できる。

日本語でも、例えば、前後の文脈に関係なく、いきなり＜ダッコ＞と言われると、＜ラッコ＞に聞き間違うことがあると言われる。音声学的には、日本語の＜ラ＞も＜ダ＞も発音の仕方は、どちらも舌先を上歯の付け根辺りに当てて発音する音だからである。子供の中に、「ラ行音」と「ダ行音」の聞き分けができず、同じ音として聞こえる子供がいるのも同じ原因である。

また、この「ラ行音」と「ダ行音」の混同現象は、日本の方言の中にも見られると言う。柴田武の「方言論」（1988）によれば、この混同現象で最も有名なのが大阪府の河内地方であり、特に有名なのが、河内弁の「ヨロガ

ワノミルノンレハララブラブ（淀川の水飲んで腹だぶだぶ）」だそうである。

このように、日本において＜ラ＞と＜ダ＞を聞き間違う人がいるということは、＜ラ＞と＜ダ＞の発音は、音声学的に似ているということを意味している。

4.2　＜ラン＞とも＜ダン＞とも聞こえる音

＜ラン＞とも＜ダン＞とも聞こえる音は、漢字では何なのかを考えてみた。

中国語の辞書を引いてみると、<lan>と発音する漢字には、主とて、蘭、攔、欄、闌、讕、瀾、爛、瓏、襴、鑭、籣、嵐、婪、藍、襤、籃、覧、攬、纜、欖、罱、懶、爛、濫という語がある。念のため、日本人には<lan>と区別できない発音で、<lang>と発音する漢字も調べてみると、郎、廊、榔、螂、閬、狼、瑯、朗、浪、莨などがある。

また、<dan>と発音する漢字には、主として、丹、単、鄲、殫、禅、箪、坦、耽、胆、撣、旦、但、担、誕、淡、啖、氮、憚、弾、蛋という語がある。同じく念のため、日本人には<dan>と区別できない発音で<dang>と発音する漢字も調べてみると、当、璫、襠、鐺、擋、党、讜、档、宕、蕩などがある。

それぞれの語の意味を調べてみたが、どれも背びれのない金魚の呼称に使う語とは思われない。唯一有り得るのは、「蛋」である。この語は、鳥などのタマゴの意味である。中国語にも「卵」<luan>という漢字があり、これもタマゴを意味するが、中国で殻のついた丸いタマゴを言う場合に一般的に使われるのは「蛋」である。なお、「卵」<luan>は、＜ダン＞とは聞こえない。

栗本によれば、「らんちう」は、「蛋魚」とも呼ばれていたそうなので、「らんちう」の「らん」が「蛋」であることは想像に難くない。後述の「5『ちう』とは何か」の中での中国の金魚の呼び方（分類方法）でも解説するが、金魚の分類でもこの「蛋」という漢字が使われている。

なお、学習研究社発行の「漢和大字典」（藤堂明保編）には、漢字の中国語音について、上古から中古、中世、現代までの音の変遷がローマ字（発音記号）で解説されている。この字典による「蛋」の中世（14世紀）及び現代の発音は、<tan>、<tan(dan)>となっており、「らんちう」が日本に持ち込まれた18世紀当時は、＜タン＞又は＜ダン＞と発音されていたと思われる。

5　「ちう」とは何か

「らんちう」の「ちう」とは何なのかを考えてみた。栗本によれば、「らんちう」は、「蛋魚」とも呼ばれていたとのことなので、「魚」を＜チウ＞と発音するのかと考えたが、そんなことはあり得ない。日本語では＜ギョ＞だが、中国語では日本にない発音で、あえて書けば＜ユイ＞とでも書けるが、＜ユ＞は聞こえず、＜イ＞となるかもしない。ただ、口を横に開かないで前に突き出して＜イ＞と発音するので、日本語の＜イ＞とはかなり違う音になる。いずれにしても、＜チウ（チュウ）＞とは聞こえない。

また、「漢和大字典」（藤堂明保編）では、「魚」の中世（14世紀）及び現代の発音は、<iu>、<ü>となっており、18世紀当時も＜イウ＞（イとウを同時に発音する音）と発音されていたと思われる。

「らんちう」の「ちう」とはどんな意味なのか。それを考えるにあたって、中国での金魚の呼び方、分類が参考になる。

日本では約500年前に中国から金魚が輸入されてから、限られた品種の金魚しか飼育されなかったこともあり、金魚の品種を分類したりすることはない。一方、中国では、形質（特徴）が多様で、多くの品種が出現していることもあり、その分類方法が何種類もある。そのうちの一つが、草種、文種、龍種、蛋種の4種類に分ける方法である。さらに、背ビレがあるかないかを基準に龍種と蛋種の2種類に分ける方法もある。

4分類法の草種は、フナの形をした金魚、つまり金魚の原型の緋ブナともいうべき金魚のことである。文種は、流金のように普通目で背ビレのある金魚。龍種は出目で背ビレのある金魚である。蛋種は、背ビレのない金魚のことである。蛋とはアヒルのタマゴのように殻を持ったタマゴのことで、金魚の体型がこれに似ているため、このように呼ぶようだ。

2分類法では、4分類法での「草種」を分類から除外している。これは、進化をする前の金魚（原型の金魚）だということで、観賞価値がないことによるそうだ。また、4分類法での「文種」は、2分類法では龍種に含まれていて、その意味で、2分類法の龍種の方が多くの品種を含む概念である。

このように、いずれの分類法でも、「蛋種」という呼び方がある。これらが日本の江戸時代（中国では明時代）からあるとすれば、当時日本に持ち込まれた背ビレのない金魚は「蛋種」と呼ばれていてもおかしくない。

では、「種」は、中国語で「ちう」と発音するのだろうか。「漢和大字典」（藤堂明保編）では、「種」の中世（14世紀）及び現代の発音は、<tʃɪoŋ>、<ṭṣuəŋ>となっており、「らんちう」が日本に持ち込まれた18世紀当時の発音は定かではないが、日本人には「ŋ」の部分は聞き取れない可能性もあり、＜チョ＞、＜チュ＞と聞こえてもおかしくないだろう。このように、現代日本で発音されている＜シュ＞とは違う発音であることが分かる。但し、この字典の中世の中国語の発音は、宋・元・明時代の中原音韻とのことなので、後述する明時代に現在のマカオ（澳門）辺りで使われていた南方中国語とも異なる発音のようである。

6　中国語の「蛋種」

6.1　普通話の「蛋種」

既に述べたように、江戸時代の日本の「らんちう」を中国の金魚として、中国金魚の分類に当てはめると、「蛋種」の金魚ということになる。この「蛋種」は、中国語の共通語（標準語）である普通話では、中国語の発音表記である併韻字母で表記すると<dan zhong>となり、敢えてカタ仮名でその読みを書くと＜ダンヂョ（ン）＞という発音となる。この内、＜ダン＞は日本語にない発音で、無気舌尖音と呼ばれる発音なので、＜ダン＞に近い発音だが、日本人には＜ラン＞とも聞こえる。＜ヂョ（ン）＞は、なんとなく＜チュウ（チウ）＞と聞こえないこともない。

従って、「らんちう」の語源は中国語の「蛋種」の可能性が高いが、現在の普通話（共通語）の「蛋種」の発音そのものだとは言い難い。なぜなら、今日の普通話は北京語

に近い北方の中国語発音であることから、金魚の渡来ルートである南方の中国語とは異なるため、発音が若干異なるのではないかと推察されるからである。

6.2　広東語の「蛋種」

日本に金魚が持ち込まれた経緯については、鈴木克美「金魚と日本人」（1997）に詳しく説明がある。同書によれば、江戸時代に珍しい金魚が日本に入ってきた経路には、長崎の西洋商館経由ルートがあり、「日本に来る外国船には、南中国の港とか中国人船員と関わって、金魚を入手する機会があったのだろう。」と記されている。すなわち、金魚の日本への渡来経路は、南方からの海路だった。このことは、1615年の東インド会社平戸商館長リチャード・コックスの日記にも、自分が中国人カピタンの弟からもらって飼育していた金魚を平戸松浦藩の藩主等が欲しいと所望されたので差し上げたとのことが記載されていることから分かる。

なお、日本に金魚が持ち込まれた年代には諸説あるが、元和年間（1615-23年）に持ち込まれたのを嚆矢とするという説もあるほど、1615年当時には日本に金魚は殆どいなかったと推察され、珍しいものだったはずである。

江戸初期の対外貿易は、ポルトガル、オランダ、スペイン、イギリス、中国が関係しているが、金魚が持ち込まれると予想されるルートは、中国（明）のマカオ経由だったと推察される。上記リチャード・コックスの日記にもマカオとの貿易に関することが多く書かれている。

当時の中国における外国貿易の窓口はマカオだったはずである。後に上海[viii]が開拓されて発展するが、当時は、ポルトガルの居留地として栄えたマカオが貿易の中心拠点だった。当然中国大陸では当時でもかなり広範囲に金魚が飼育されていたであろうから、当時はまだ珍しかった背びれのない金魚（「蛋種」の金魚）も「閩書南産志」に記載があることを考えるとマカオにも存在していたであろう。

このマカオを中心として海路で活躍していた人たちは広東語（粤語）などの南方中国語を話していたと想像される。それでは、中国の南方言語（方言）として現在広く香港[ix]、台湾、東南アジア方面においても使われている広東語では「蛋種」はどう発音するのだろうか。

広東語の発音表記には統一したものがなく、何種類かあるが、東方書店の「広東語辞典」の表記での「蛋種」の発音は、<darn jung>ということになる。広東語でも<d>は無気舌尖音であって、<arn>は、鼻音の長母音であるが、日本語の長音ほど長く発音しないようである。従って<darn>は、＜ダ（ー）ン＞となる。普通話（標準語）と同じく、日本人には＜ラン＞とも聞こえるはずである。

他方、<jung>の<j>は、国際表音文字では<dz、dʒ>に近い発音で、<u>は、標準語のuに近く、<ung>は、鼻音の短母音であり、やや低く発音される。従って、カタ仮名で表記すると＜ヂュ（ン）＞であり、＜チュ（ウ）＞と聞こえるはずである。なお、広東に近い少し南のベトナムでは<chủng>（Weblioベトナム語辞典）と発音するそうなので、十分＜チュ（ウ）＞と聞こえる。

以上から、広東語の「蛋種」は、＜ダンチウ＞又は＜ランチウ＞と聞こえると思われる。長崎を中心として交易に同行していた広東人

が「この金魚は蛋種だ」と説明したら、日本人（正確には西洋人と日本人）には「この金魚はランチウ（ダンチウ）だ」と聞こえたに違いない。これで、江戸時代の「らんちう」の絵などに「ダンチウ」という振り仮名が付いている謎が解けたと言える。

また、日本に「らんちう」を伝えた人が、上記のように中国人なら、漢字を書いて見せることができたはずなので、日本に漢字がそのまま伝わったはずである。なお、伝えた中国人が漢字を書けなかった可能性も否定できない。しかし、仮に漢字が書けなくても中国人ならそれがどういう意味なのか説明できるはずなので、その意味さえ伝わっていない[x]ことを考えると、伝えたのは中国人ではなく、西洋人の可能性が高いと言える。

当時、日本との交易を円滑に進めるために西洋人がゾウやラクダなどの珍しいお土産を持ってきたことは有名であり、上記リチャード・コックスの日記にも見られるように、金魚もその一つだったことはれっきとした事実である。したがって、日本人にお土産として渡した時には、西洋人から音（発音）しか伝わらなかったのだと考えられる。つまり、「らんちう（ダンチウ）」という発音は、直接中国人から伝わったものではなく、間に西洋人が入って間接的に日本人に伝わった可能性が高いことが分かる。それも日本側はかなり身分の高い士族か豪商が聞き覚えた言葉（音）と考えられる。この語がすぐ後に品種名として文献に現れることになることから考えると、決して庶民から伝わった言葉ではないと思われる。

7　まとめ

「らんちう」という金魚がいることは、日本では多くの人が知っている。金魚の王様ともいわれていて、購入するときは結構な値段になる。しかし、この「らんちう」という名称は、何語で、どういう意味なのかを知っている人はいない。本稿ではこの謎を解き明かすことを目指した。

金魚はそもそも中国で人工的に創られた観賞魚である。日本にいる金魚は、元々はすべて中国から持ち込まれたものである。しかし、「らんちう」は、中国に似たような品種があるものの、日本で独自に創られた形質を持つ品種である。したがって、日本で独自の名称を付けてもおかしくない。しかし、この品種は、明治時代に創られたにもかかわらず、江戸時代に日本に伝わった名称を品種名としている。江戸時代の「らんちう」と現代の「らんちう」は、品種としては異なるものであるが、名称が同じなのである。

本稿では、江戸時代に伝わったこの名称がどのような意味なのかを考察した。江戸時代の書物及び図譜の中に、背びれのない金魚のことを＜らんちう＞とも＜ダンチウ＞とも呼ぶという解説があることに着目して推論を展開した。「らんちう」は、中国語であるという前提のもとに、＜らん＞とも＜ダン＞とも聞こえる漢字を探した。その結果、「蛋」という語を見出し、また、「ちう」については、「種」という語を見出した。

「らん」については、中国語で<lan>と発音する和蘭陀の「蘭」や<luan>と発音する

「卵」では、日本の書物（安達の「金魚養玩草」及び栗本の「魚譜」）に「ダン」という振り仮名があることが説明できない。「蘭」や、「卵」は、いずれも江戸時代に「らんちう」が持ち込まれた後に、日本国内で音に合わせて考案された当て字である。「らん」は「蛋」が正しい。

「ちう」については、「虫」の表記では、中国語（普通話）では<chong>と発音され、＜チウ＞とは聞こえ辛い。「鋳」（あるいは魚へんに寿）の字は、日本語で＜チュウ＞であるが、中国語では<zhu>と発音し、＜チウ＞に近い。しかし、これらのいずれの漢字も意味が通じない。これらも江戸時代に「らんちう」が持ち込まれた後に、日本国内で音に合わせて考案された当て字である。したがって、「6.2　広東語の「蛋種」」の項でも説明したとおり、中国の金魚の分類としても使われている、「種」の広東語などの南方の発音に由来すると考えるのが正しいと言える。

以上の考察から、「らんちう」とは、「蛋種」の中国語発音（広東語などの南方の中国語発音）に由来するという結論が得られた。この「蛋種」は、中国国内でも金魚の品種の分類の一つとして用いられており、背びれのない金魚の呼び方として適当であると考える。

参考文献

1 「中国金魚」徐金生、歴春鵬、徐世英編著、農業出版社、1981
2 「金魚飼養管理」蘇州市園林局編、中国環境科学出版社、1988
3 「中国金魚（改訂版）」王春元、金盾出版社、2000
4 「中国珍稀金魚図典」張正農編、上海文化出版社、2008
5 「復刻版　科学と趣味から見た金魚の研究」松井佳一、成山堂書店、2006
6 「金魚文化誌－書誌学的考察－」松井佳一、鳥海書房、1987
7 「金魚と日本人」鈴木克美、三一書房、1997
8 「金魚養玩草」安達善之、1748
9 「博物館魚譜＿金魚」東京国立博物館研究情報アーカイブズ
10 「原色金魚図鑑」、岡本信明・川田洋之助監修、池田書店、2011
11 「リチャード・コックス日記　試訳」武田万里子、森睦彦、法政大学史学会「法政史学」巻23、24、1971、1972
12 「方言論」柴田武、平凡社、1988

文末脚注

i 中国珍稀金魚図典（2008）

ii 書物ではないが、魚を描いた絵図では、宣徳四年（西暦1429年）の銘がある宣徳帝魚藻図に背びれのない金魚が多数描かれている。したがって、背びれのない金魚はこの頃には存在していたことになる。この絵図が実在の金魚を描いたものであれば、珍しいものとして皇帝に献上されたものであろうから、一般的には知られていなかったものであろうと推察される。

iii 「から」とは、「唐」のことで、つまり中国から渡来したことを示している。

iv 最初は＜「DR.タワシの金魚百科」http://www4.ocn.ne.jp/~tawashi/＞に掲載し、2012年10月から＜「らんちうフリーク龍錦」http://ranfreak.web.fc2.com/＞に掲載した。

v 中国珍稀金魚図典（2008）では、中国から日本に持ち込まれたとき、広東語で背びれのない金魚を「卵虫」と呼んでいたのを日本人が翻訳して魚編に蘭と言う字と魚編に寿という

漢字で表記したと書かれているが、広東語で「卵虫」と呼んでいたということはあり得ない（漢字の意味が通じない）のと、中国語と日本語の発音が一致しないので、日本国内での表記の変遷をありそうな物語に創作した作り話と思われる。20世紀に出版された中国書籍にこのような解説は全く存在しない。「らんちう」が21世紀になって中国でも注目する品種となったことの表れであろう。

vi　割り箸の種類にも「らんちゅう」箸というものがあるが、これは金魚の「らんちう」に形が似ているから名付けられたと言われている。

vii　本稿で図1として用いた絵は、衆鱗図に描かれている魚と全く同じ絵ではあるが、衆鱗図には、本稿が着目する栗本の書いたような解説文は書かれていない。

viii　上海は、現在は中国を代表する国際貿易都市だが、この地は、アヘン戦争（1840～42年）後に欧米各国等が進出して形成された都市である。

ix　香港も上海と同様に、アヘン戦争後イギリスの領土となり、その後発展した都市である。マカオとは70km程離れたところにある。

x　安達善之は、「らんちう」の「らん」がタマゴの意味であることをある程度知っていたとも考えられる。日本で初めて書物で「らんちう」を紹介した安達は、「名の正字」として「卵蟲」と表示している。「蛋」とは表記しなかったが、「卵」と表記して「卵」の左側に「ダン」と仮名を付けてある。日本では「蛋」という語は通常使用しないので、同じ意味の「卵」を使ったのかも知れない。「卵」は、日本語では<らん>の発音になるので、好都合だったと思われる。なお、「ちう」については、「蟲」と表記している根拠がよく分からない。「蟲」は、「虫」の旧字体であるが、「蟲」と書くと、昆虫以外の動物を指すこともあるとのことなので、その意味があるのかもしれない。